

えぽっく

八重洲古書館
RETRO REVALUE RECYCLE

創刊7号
2000年9月28日発行
中央区八重洲2-1
八重洲地下街
TEL033272-2888

日本の古本屋

金井書店&八重洲古書館は、全国2695軒の古書店の業界団体『全国古書籍商組合連合会』加盟店です。この連合会を『日本の古本屋』と言う名称で皆様にアピールする活動が本年より始

まりました。古本屋そのものですが、東京に大正9年です。



は江戸時代からあった組合が結成されたのは、

世界的に有名な『神保町古書店街』は明治後半から纏まりはじめ現在のような専門的な古書店街が出来上がりました。金井書店のスタートは昭和4年、目白(当時は本当の郊外)です。郊外から本を集め、展示即売会に出品したり、交換会(同業者の市場)へ出品し、古い~本から新しい本まであらゆる書物を扱ってきました。

神保町のマニアなお客様中心の営業とは違う路線を八重洲にて始めたのが、1983年。本を手にする人全てがお客様と考え、兎に角入りやすいお店をご提供しようと努めてまいりました。新しいものを半額で販売する大型チェーン店がこの数年急成長しておりますが、こちらとも違う路線のもと、書物自身が持つ温もりを大切に、皆様の心に残る書物たちを一生懸命集めて、ご期待に添いたいと頑張っております。

『日本の古本屋』は本のエキスパートが集まる古書店主集団です。情報ネットワークも整備されつつあり、書物に関することを調べたり、探したり、手に入れたり、いろいろなのがこのネットワーク上から可能になるのです。八重洲古書館、八重洲店もこのネットワークの一店舗として、多くの皆様に歓迎される古書店として、模範となるように勉強していきますので、『日本の古本屋』と共にご指導ご鞭撻のほど宜しくお願い申し上げます。更に、皆様の度重なるご利用をお待ち申し上げます。

八重洲古書館店長 渡辺明子
金井書店八重洲店店長 川上亜衣子
スタッフ一同

スタッフのメッセージ

さて、今月は映画特集でございます。私、名前が”しま”なのですが間に”ね”が入って”しねま”だったらどんなにいいだろうと思っているくらいの映画好きでして、特別にうれしく思っております。今夏は灼熱の柴又を訪れ、帝釈天、”とらや”、記念館と我らが寅さんを堪能し、おまけに夜空には「寅さん花火」と言い張る代物が狂い咲くという素晴らしい一日を過ごしました。と言っても別に私は寅キチではなく、松竹映画なら断然、昭和20、30年代の黄金時代、中でも『東京物語』がだんとつに好きです。初めて見たのは高校3年の冬。「泣ける映画ない？」と聞いた私に対し友人が「『東京ストーリー』だったかな？古い映画」と答えてくれました。(何故友人が物語をストーリーとわざわざ翻訳してくれたのかはいまもって解せません。)運良くビデオ屋で『東京物語』に出会えた私は、何気なく再生ボタンを押し、あれよあれよという間に、号泣の嵐の中にいました。以来何度見たか分かりません。生涯不動のベスト1です。

そんな私に最近朗報が入りました。『東京物語』のポスターがもらえることになったんです。それも松竹大船撮影所の閉鎖に伴う倉庫の整理中に発掘されたお宝？ポスターです。世話してくれた友人の話によると、「なんか新しめー」と言うことなので、そんなに期待はしていません。けど、もしも公開当時のものだったら・・・！と私の心は踊るばかりです。

八重洲古書館 村越史麻

最新情報はインターネットホームページをご覧ください。
<http://www.kosho.co.jp/>

RETRO = 懐古趣味
REVALUE = 再評価する
RECYCLE = 再利用、環流する

読み終えた本、昔の本をお売り下さい

これからも、本をお売り戴くこと、お買い上げ戴くことの両面にわたり、相変わりがせぬご利用いただきたくお願い申し上げます。

ご意見ご感想ご提案をお待ち申し上げます。
下記宛にお寄せ下さい。

金井書店営業本部
〒161-0032 東京都新宿区中落合42116
FAX 03-3953-7851
E-mail: office@kosho.co.jp

20世紀懐古館

日本の映画界

4年に一度のスポーツの祭典である・オリンピックで、日本も、初日の栄冠を皮切りに、幾つものメダルを獲得しました。見事な成績を収めた種目もあれば、不本意な結果に終わってしまった種目もありました。結果としては、総じて日本は、まだまだ世界のレベルに達してはいない、と痛感した部分が多くありました。しかしまた、日本の選手が世界という舞台で活躍する姿を、世界中の人々が注目したのも、事実です。

これは、決してスポーツに限ったことではありません。日本が近代化への道を歩み始めてから、漸く一世紀と少しが過ぎたばかりです。その歴史のなかで、日本は最初の一步を出遅れました。ほとんどの分野において、日本は、諸外国の背中を見ながら、横に並ぼうと努力してきました。しかし、近年、それぞれの分野において、日本人が、世界に認められ、注目を集めてくるようになりました。そのなかでも、とりわけ『世界の』と冠されるべき人はというと、多くの人々が、故黒澤明監督を思い浮かべるのではないのでしょうか。

そんな、『世界のクロサワ』を産み出した、日本の映画界が、今月の20世紀懐古館のテーマです。日本独自の美意識が溢れる、古き時代の日本映画や『クロサワ作品』を中心に、日本映画について纏めてみたいと思います。

世界における映画機械は、アメリカのエディソンによるキネトスコープと、フランスのリュミエール兄弟によるシネマトグラフに代表されます。この二つの機械が日本に持ち込まれたところから、日本映画の歴史がスタートする訳ですが、当初、『動く写真』に、人々は大変驚き、また興味を惹かれました。これは明治の末期、まさに19世紀から20世紀へと移り変わる世紀末の時代でした。そして、この『動く写真』は、『活動写真』と名付けられるのです。

最初は、風景や風俗といったものが大半でした。その後は徐々に、物語を持つ劇映画へと移り変わり、電気が普及して、浅草や横浜といった都心部に常設館ができると、人々の映画熱も次第に過熱してゆきました。そこで、弁士の登場となるのですが、これは映画そのものや人気俳優とは別に、というよりも、それ以上に弁士そのものにも鼻唄や人気が出てきました。これは、当時の映画が無声だったので、弁士の語りにより、同じ映画でも随分と違ってしまいうことで、当然といえば、当然の事だったのでしょう。

日本で最初に継続的に映画製作を行った人には、牧野省三がいます。また、彼が育てた尾上松之助が、最初のスターです。この当時の映画は、旧劇映画・新派映画などが主流で、特徴として、映画女優が存在しなかったため、歌舞伎の様に、女形が女性の役を演じていました。そして、明治45(1912)年に、現在の日活株式会社となる、日本活動写真株式会社が設立され、東京の向島に、撮影所が建設されました。ここで、多くの日本製映画が製作される訳ですが、欧米から輸入された映画を多く観ていた若い観客層、特に学生たちは、次第にそれまでの映画に不満を持つようになってゆきました。こういった人々を中心となって、大正9(1920)年、松竹キネマ合名社が設立されます。日活より遅れて、映画へ参入した松竹ですが、アメリカ流儀を取り入れた経営、特に女優の採用や弁士に変わる字幕の採用などで、人気を博します。これは、旧





劇映画や新派映画に対し、純映画劇といわれいま。当時の松竹といえは、やはり小津安二郎監督が有名でしょうし、田中絹代ら女優陣も、活躍してゆきます。この松竹に押される形で、日活も方向転換を余儀無くされ、新劇系や現代劇の舞台経験者などを起用するようになり、岡田嘉子などが活躍する事になります。この新しい日活を引っ張ったのが、村田実監督です。

また、様々なアメリカ映画が輸入されたことで、日本の映画も多様なジャンルが形成されてゆきます。チャップリンなどに触発された喜劇もそうですし、日本独自のものである剣劇映画、いわゆる時代劇もでてきて、それぞれがアメリカの映画に劣らない人気を獲得してゆくのです。特に、マキノ映画が大人気でしたし、鈴木伝明・長谷川一夫・片岡知恵蔵、また梅村蓉子・沢村春子・高峰秀子など、現在見ても、色褪せない俳優女優が、キラ星のごとくに活躍しました。また、技術の進歩により無声映画から、トーキーと呼ばれる有声映画へと移り変わってゆきます。

この時代は、日本が次第に軍国主義へと移り変わってゆく過程でもありました。言論や思想の統制がなされ、検閲が入るようになり、外国の映画が輸入禁止となり、戦争を賞揚する映画が、多数製作されるようになりました。しかし、その一方で、観客が喜んで観たのは、やはり国策からは程遠い娯楽映画で、実際に良質の映画も、多く作られました。

ところで、日本映画の黄金時代といえば、やはり戦後、1950年前後ということになるでしょう。先にも述べた、『世界のクロサワ』が活躍するのも、この時代にあたります。昭和26(1951)年のヴェネチア国際映画祭で、黒澤明監督の『羅生門』が、グランプリを受賞したのを記憶している方も多くいらっしゃるでしょう。それまでは、国際的には全くといっていい程無名だった日本映画が一躍脚光を浴びたのがこの受賞でしたし、その後の国際映画祭における数々の受賞の皮切りともなるものでした。そこには、ヨーロッパのものともアメリカのものとも違う、独自の世界が展開されており、それこそが、私達が世界に誇る日本映画でもありました。ただ、残念な事に、日本国内においては、この作品は低い評価しか受ける事はありませんでした。

黒澤監督は、その後も傑作を数多く製作しており『七人の侍』や『用心棒』は、それぞれ『荒野の七人』『荒野の用心棒』のモデルとなったりもしています。しかし、黒澤監督の作品は、日本国内をはじめ、海外でも、一方的に批判された時期が長くありました。ヌーベルバーグの世代の台頭によって、フランスを中心に否定・無視をされたのです。もっとも、その反面で、フェデリコ・フェリーニや Coppola、ルーカス、スピルバーグといった人々に、多大なる影響を与えたのも事実です。結局、素晴らしいもの程、賛否両論激しくなってしまうのかもしれない。80年代に入って、黒澤作品の再評価も始まり、『影武者』『乱』といった、西洋劇のリメイクもので、新たな境地を開き、映画祭でグランプリを獲得したことによって、結局はその名は、不動のものとなりました。平成10(1998)年に、監督逝去の報道が世界中に流れた時は、映画に携わる人々だけではなく、映画を愛する全ての人々に、その死を惜しまれ、各国で哀悼の声明が発表されました。

近年は、ハリウッド映画やヨーロッパ映画に押され気味で、日本映画は今一つ精彩を欠いていましたが、先頃、北野武監督の映画祭グランプリ受賞や、大規模な純粋の娯楽映画の製作など、漸く低迷していた日本映画界にも、ほんの少し、光明が見え始めてきています。もしかしたら、第二の黒澤が、近く生まれるのかも知れません。それを期待しつつ、成立間もない頃や、全盛を誇った頃の日本映画の撮影風景や俳優、監督達の様子、また彼等の言葉に触れ、銀幕の向う側に広がる世界に、どうぞ、一時、心を遊ばせ、愉しんでいって頂ければと、心より願っています。



(文責 川上亜衣子)

展示場所：金井書店八重洲店 & 八重洲古書館
開催期間：2000年10月1日(日)～10月30日(月)

映画関連書を展示即売いたします

講座・日本映画 岩波書店 函 日本映画の誕生 無声映画の完成 トーキーの時代 戦争と日本映画 戦後映画の展開 日本映画の模索 日本映画の現在 日本映画の展望 総索引付 揃 9冊 ￥16,000

全集黒澤明 岩波書店 函 月報付 揃 6冊 ￥17,000

悪魔のように細心に！天使のように大胆に！ 黒澤明 東宝 初帯 ￥8,500

現代愛の映画全集・日本映画篇 現代映画研究会編 新風出版社 カバー ￥6,500

恐怖映画大全 - 怪奇映画史大全集 - 大村光正編 辰巳出版 初カバー ￥3,500

東映映画三十年 - あの日、あの時、あの映画 - 東映映像事業部編 東映株式会社 限定 カバー ポスタ-付 ￥33,000

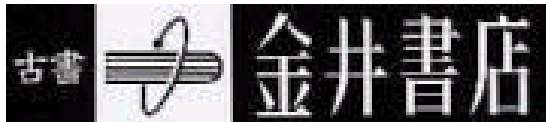
千恵蔵映画 -附全作品目録・年譜- 東映太秦映画資料室編 限定 函 ￥58,000

作品から歴史・エッセイ 雑誌などお楽しみ下さい
パンフレット 100円からいろいろ

現品限りにつき売り切れの場合はご容赦下さい。



日本映画年鑑 第二年版・第三年版
朝日新聞社
2冊 ￥58,000

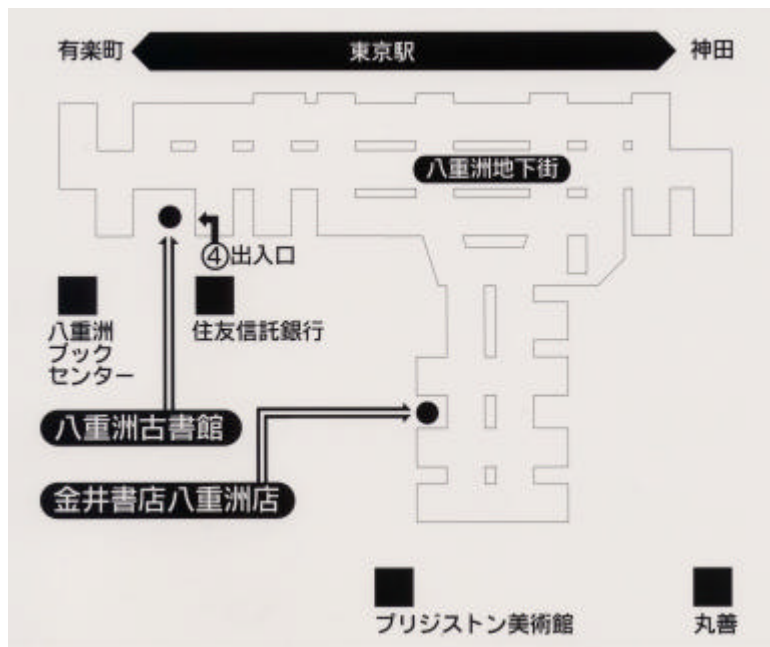


TEL&FAX 03-3275-2691

〒104-0028 東京都中央区八重洲2-1 八重洲地下街



TEL&FAX 03-3272-2888



ご意見ご感想ご提案をお待ち申し上げます。
下記宛にお寄せ下さい。

金井書店営業本部

〒1610032 東京都新宿区中落合4-21-16

FAX 03-3953-7851

E-mail: office@kosho.co.jp

読み終えた本、昔の本をお売り下さい